



## 人々とのかかわりの中で

人は人々との関わり(間)で、人間(じんかん、にんげん)として成長します。安井息軒にとっても、幼少時の父滄洲や兄文治の存在は、大きかったと思います。

成長して大坂(江戸時代までは坂)や江戸で学んだ時も篠崎小竹や古賀侗庵、松崎慊堂等に師事し、影響を受けました。後に江戸に移住して息軒が主宰した「文会」では、塩谷岩陰や吉野金陵、木下犀譚等、当時の一流の学者たちと切磋琢磨し、江戸末期から明治初期にかけて日本一の学者として大成したわけです。

そして迎えた幕末から明治への転換点。年老いた息軒や家族の身の安全を心配する弟子たちの勧めに折れる形で、今の埼玉県川口市東領家に当たる領家村、弟子の高橋善兵衛の弟宅に疎開。滞在期間は慶応4年(明治元年)の9か月間でしたが、ここでも河原順信らたくさんの弟子たちを育て、今でも息軒は川口市の人々からも尊敬されています。そのことが縁で、平成15年から夏休みを利用して双方の小中学校の児童・生徒を中心に、相互訪問・交流を開始。26年度からは大淀川河南を中心とした旧飢肥藩清武郷にある学校の、小学6年生を対象を広げて実施しています。



今年も7月28日から30日まで川口市の子どもたちが宮崎市(清武町)並びに本館を訪問し、交流を深めました。没後140年近く経過した今でも、息軒が二つの市をつない

でいます。交流におけるかかわりを通じて、子どもたちは着実に成長しています。そして、8月18日からは、宮崎の子どもたちが、川口市や東京の息軒先生所縁の地を訪ねます。うれしい再会です。

## アジアや世界からも来館!

安井息軒は国内だけでなく漢学の本場である中国(清)や朝鮮まで名前が轟き、睡餘漫筆等を見ても驚くほど当時の西洋の事情や医学、天文学等にも通じていました。

そして今年も、宮崎大学の国際交流プログラムでアジアや世界の学生が本館を訪ね、華道や茶道等の日本文化や安井息軒の人となりに触れました。まずは7月12日、14名のタイの学生が来館し、17日には39名のアジアやアメリカの学生が来館しました。(文責 川口)



## 〈清武郷のかくれた史跡 第5回〉 「清武城周辺の石塔②」

前回は、清武城域内にある石塔をご紹介しましたが、今回はさらにその周辺の石塔類をご紹介します。

前回紹介した市指定史跡、伊東祐堯公墓の西側、現在長善寺・かのう霊園の敷地



観音寺跡の板碑

となっている場所には、かつて観音寺という寺院がありました。『日向地誌』が編纂された明治初頭には、既に地名として残っているのみでした。ただ、今から20年ほど前までは、石塔や石仏が散在しており(『清武町の文化財 第3集 石造物加納編』1980年)現在、長善寺の境内に一部がまとめられています。その多くは、18世紀から19世紀初頭の墓石・供養塔で、かつての地権者だった阿萬家のものが目立ちます。比較的大型の板碑や地藏菩薩・弘法大師像も確認できます。前回紹介した中山寺ともども、清武城の周辺が近世末期に至るまで宗教的な場であったことが伺えます。



南光院跡の石塔・石仏

清武城からみて北東側にも、南光院(愛宕山大聖寺)がありました。現在の国道269号、加納小入口交差点のすぐ西側にある丘陵がその跡地です。薬師堂のそばには、数基の板碑や石仏が残る他、境内裏手の愛宕神社境内にも、板碑が残っています。愛宕神社社殿裏の板碑には、「奉読誦大乘妙典二百部二世安樂所/持経者当寺開山任誓法印/于時寛文元年八月時正敬白」と、しっかり銘が残っており、開山が任誓法印、寛文元年(1661)には既にこの寺院が創建されていたことが伺えます。



愛宕神社社殿裏の板碑

(吉田良夫『南光院の由来』)  
(文責 新名)

### 9月のきよたけ歴史講座 「中野地区の史跡見学会」

- ☆講師 安井息軒顕彰会 岩切 哲氏
- ☆集合 9月26日(土) 10:00 出発、きよたけ歴史館から歩いて旧宅のある中野周辺散策、11:45 終了歴史館解散
- ☆準備 歩きやすい服装、靴、水筒、カメラ持参可、帽子等

### 秋のミニ展示 9月19日(土) ~ 11月1日(日)

#### 「写真で見る郷土の仏師 平賀快然の仏像展」

- ☆昨年木花地区より寄託された毘沙門天像も展示。その他仁王像6点のタペストリーも… 9時 ~ 16時半まで
- 毎週月曜日休館、月曜祝祭日の場合は翌日(土・日除く)